

# 肥後医育振興会に期待する

Medical Campus のさらなる活性化に御協力を!!



熊本大学大学院生命科学研究部長・熊本大学大学院医学教育部長  
熊本大学医学部長  
西村 泰治

肥後医育振興会におかれましては、まずご発展のこととお慶びを申し上げます。私は平成二十七年四月一日より竹屋元裕部局長の後任として、大学院生命科学研究所長、大学院医学教育部長ならびに医学部長を拝命いたしました西村泰治でございます。前任の原田信志・元部局長（現学長）ならびに竹屋元裕・前部局長（現理事）が培われて来られました部局の活性化を、さらに発展させるために尽力させて頂きたく存じます。

日頃より肥後医育振興会におかれましては、教員組織としての医学系・生命科学研究所における研究の活性化へのご支援、さらに大学院教育組織である医学教育部ならびに学部教育組織である医学部医学科における教育活動に、ご支援を賜りまして誠にありがとうございます。また最新の医学・医療情報の社会への普及活動においても、優れた活動を実践しておられますことにつきましても、厚く感謝を申し上げます。

熊本大学は研究大学強化促進事業（いわゆる R U - 22）および Super Global University (SGU) に採択されており、また医学領域におけるミッション再定義では、「最先端の研究・開発機能の強化」を遂行する、教育・研究拠点大学として位置づけられております。このような大学のミッションを貫徹し、さらに未来に向けてこれを発展させるためには、教員の弛まぬ

努力が求められます。また第三期中期目標・計画の作成と達成に際しては、教育・研究力および診療の強化や人事制度の改革などについて、従来になく思いきった改革が求められております。これを遂行するのが私の任務であると心得ております。

平成二十八年度は熊本医学校の開校より数えて二二〇周年の記念すべき年を迎え、これを期にして肥後医育記念館の改修や、史料収納庫の新設などが企画され熊本大学医学部の貴重な資料が保存される計画であると伺っております。また医学部同窓会の熊杏会の主催により開催される「熊本大学医学部創立二二〇周年事業」にも、私どもの各部局と共に共催されると伺っております。平成二十八年度には臨床医学研究棟も竣工する予定でございますから、このような節目の時期に熊本大学 Medical campus のさらなる発展に向けて、過去、現在そして未来について共に考えさせて頂きたいと存じます。

肥後医育振興会におかれましては、今後とも医学系・生命科学研究所や大学院医学教育部ならびに医学部医学科との連携を深めてくださいました上で、相互の活動や将来構想について密な情報交換を行って、医学・生命科学の教育・研究・診療の発展に御協力を賜りますことを願っております。何卒よろしく、お願いを申し上げます。

医薬の深い連携の歴史



熊本大学大学院薬学教育部長・熊本大学薬学部長  
甲斐 広文

公益財団法人肥後医育振興会におかれましては、来年には、二十周年を迎えられまことに心よりお祝いを申し上げますと共に、これまでの地域医療に対するご貢献、若手研究者に対する研究助成ならびに留学生に対する奨学金助成等、多方面にわたる多大な貢献に対して深く感謝申し上げます。

現在、熊本大学の医学部と薬学部は、生命科学研究所という一体化した研究組織となっておりますが、医薬の教員同士が密に連携した研究教育が実質的に機能している組織体制は、日本で唯一と言っても過言ではございません。これは、他大学の薬学部から大変羨望され、特に、熊本大学医学部附属病院の先生方のご指導による「医学生の臨床実習（ボリクリ）」と連携した参加型実務実習の導入は、他大学に類を見ない実践的な薬剤師教育システムが構築できていると高い評価を受けております。このように、熊本大学薬学部が、創薬研究面も含め、全国的にも高い評価を頂いているのは、本振興会の会員の先生方による多大なご支援のお陰でございます。心より感謝申し上げます。

熊本大学薬学部は、国立大学薬学部として唯一の独立キャンパスであり、キャンパス内に一千種以上の薬草が観察できる薬草園を設置しております。また、キャンパス内の熊葉ミュージアムには、古い医書など貴重な資料が展示され、かつ、大江地区総合研究棟一階には世界の薬草の展示コーナーも本年七月に設置されました。本年から、日本一美しい薬草キャンパスを目指した「薬草パーク構想」を立ち上げ、熊大基金を活用した寄付活動もスタートしました。今後も、「熊葉」は「日本一、薬学部らしい薬学部」を目指し、教員、学生が、志を同じくし、医学部のご支援も頂きながら、精一杯尽力していく所存です。

最後に、肥後医育振興会の諸活動を通じて、熊本県下の医療が益々ご発展されますことを祈念申し上げます。

このように熊本ならではの医薬連携は、実は「再春館」時代よりも、さらに歴史を遡ることが出来ます。肥後における医薬の歴史として記されているのは、肥後熊本藩第七代藩主細川宗孝の時代に、村井見朴医師により創立された「復陽洞」でございます。村井医師は一七五一年に失明されましたが、この頃までに「復陽洞」で薫陶を受けた医師は実に七十一名を数えたといわれています。この「復陽洞」には薬園が整備され、一七三三年「闢草会」が開かれました。「闢草会」は、参加者が採集した薬草につ

いて、鑑定、性状、効能、応用等を考究し、真剣に質疑討論する会合でありました。これは当時における薬学大会ともいえるものであり、我が国最古の薬学大会の記録ではないかといわれております。この「闢草会」は後年の「再春館」にも引き継がれております。また、「再春館」と時期を同じくして、一七五六年七月、第八代藩主細川重賢公により「蕃滋園」が設立され、藩の薬草園は、この蕃滋園を中心として、茶碗山、矢部町、熊本市保田窪、一の宮町坂梨などにあつたといわれております。熊本において、「再春館」が医学教育、「蕃滋園」が薬学教育の緒とされていきますが、それ以前の「復陽洞」は、医学薬学が連携した生命科学研究所の緒と言ってもよいのではと個人的に思っております。